

平成19年度 大学・附属四校園合同研究交流集会

滋賀大学教育学部・滋賀県総合教育センター共同主催

集会テーマ

「理論と実践の融合を図り、地域のニーズに応えられる教育研究の新たな展開を考える」

共同研究の発展を期して

教育学部長 秋山元秀

中期目標に掲げた大学と附属校園との共同研究の推進が、年度ごとにより具体化し、成果を挙げていることに、学部としても大変たのめしく思うところでありますが、とりわけ昨年8月には、皆様のご尽力のおかげで、第1回の大学と附属四校園が一同に会した共同研究発表大会が成功し、本学における大学と附属校園の共同研究は、新しい段階に入ったと思います。

今年度は、このような成果をふまえ、大学の側がより積極的に共同研究を企画立案し、附属の教育研究を大学側に取り込んでいくような試みもなされるときいています。附属校園が教育実践の臨床の場として、教育学部の教育研究と不可分なものであり、相互の連携によってこれからの滋賀の教育の質を高めるような成果がうまれることを期待しています。とくに現在、学生たちの実践力を高めるために、新しい教育参加・教育実習のカリキュラムが、附属以外の公立学校も一部に含みながら始まっていますが、これについても、いま求められている実践力のある教員を養成するために、どのような効果をあげることができるか、共同研究の重要なテーマであると思います。

また地域からも教育についてさまざまな要望が寄せられていますが、これに対しても、大学と附属校園が一体になってこたえていく体制を作らなければならないと思っていますが、それをどのように実現していけばよいのか、ともに連携しながら研究していくことが必要です。

今年はそのための節目の年になりそうです。関係の皆様のご健闘をお願いします。

日時 平成19年8月20日(月) 13:00～16:40

受付 12:30～13:00

主催者挨拶 13:00～13:15

4校園平成19年度研究概要発表・協議 13:15～14:35

附属幼稚園 板谷 薫・森 千代子

附属小学校 松山 辰也

附属中学校 澤田 一彦

附属特別支援学校 堀居 孝至

滋賀県総合教育センター研究員発表・協議 14:45～15:30

研究員 川原林 正宏

研究員 國領 正博

講演 「食育で何をめざすか」 15:35～16:45

教育学部教授 堀越 昌子

会場 国立大学法人 滋賀大学教育学部 視聴覚教室

平成19年度附属4校園研究概要

附属幼稚園

研究主題を「もの・ひと・自分に向き合いながら、自分と相手との関係性を創り出す子どもをめざして」～教育的価値の高い環境を求めて～と設定し、ともに育ち合う関係性を創り出すための発達のプロセスを求めていきたいと考えている。

特に今年度は、関係性を創り出す環境について、環境の意味を問いながら、「のりだす・ゆきかう・みつめる」という心の揺れに応じ、教育的価値を高める環境のあり方について研究を進めていこうとしている。また、本園の特色である広い園庭を生かし、身体能力を高める環境や自然との関わりが豊かになる保育について考えていきたい。

現在、研究保育や日常の実践を通して、関係性を創り出す力として5つの視点から子どもの成長をとらえ、より価値のある環境を探り求めている。そこで、大学教員の専門的な立場を生かしたものの見方、考え方にふれ、より研究を深めていきたいと切に願っている。

附属小学校

「確かな学力」を高める。本校の研究の柱である。17年度までは、個人の「意欲」(本校では学ぼうとする力)面に目を向け、「確かな学力」を高めるための学習指導法の研究を進め、様々な子どもの学びに対してどのような指導が効果的なのか各教科の授業実践研究を通して、深めてきました。18年度からは、「個」から「集団」に目を向け、学級集団の「仲間」との「対話」を通して、「実感」の伴った「確かな学力」を高めるべく、更に効果的な学習指導法のあり方を探ると共に、学校のみがもつ「教育力」の意義について見つめ直しているところです。

特に、本年度は、大学の先生と各教科研究単元を決め、本校の研究主題をベースにしなが、実際の子どもの学びの姿をもとにして、研究をより確かなものに行っているところです。

附属中学校

大学と附属中学校との共同研究のひとつに「教科の明日を語る会」があります。この会では、大学と共同で教科の研究を積み上げきた成果を公表するとともに、日頃の授業の中で直面しているさまざまな教育課題について現職教員および大学生、大学院生とともに語り合います。今年で5年目をむかえ、のべ430人が参加しています(主催者側除く)。毎年、夏期休業期間中に、教科ごとに1日あるいは半日単位で行いますが、本年度は、一部の教科で8月30日に授業も公開して行います。会の内容の検討や運営は、学部教員・公立中教員(研究協力者)・附属中教員の三者で一体的に協力しながら進めるため、学部教員との共同によって研修内容の高度化、深化を図る、現場のニーズに合致した、真に値打

ちのある研修内容・研修の機会を提供する，蓄積した先進的な教育研究の成果を広めたり，さらに深めたりするという点で大きな効果をあげています。以上のように，教科等について内容を充実させて，滋賀県の教育界への積極的貢献を図ること目指しておりますので，是非ともご参会いただき、今後の学校教育のあり方についてともに研修を深める機会を持てれば幸いに存じます。

附属特別支援学校

本校の現共同研究は，2003年度に立ち上げた6年間の研究である。本研究は，発達，自閉症，発達障害，情報，社会参加の5つのニーズ研究と，教員の専門教科等に応じた14の共同研究からなり，以下の項目を目的として研究を進めている。地域における特別支援教育のセンター的役割を担う附属学校となる。個別の教育ニーズに基づく教育実践を行う附属学校となる。教員や学生の専門性を高める附属学校となる。

本研究システムは，大学の理論と附属校の実践を融合させた大学との共同研究が基盤となる。大学教員による講義やゼミ方式を取り入れた研究活動により本校教員の資質向上を図りながら，本校や地域の学校園における今日的課題についての状況および研究の方向性などを調査するとともに，大学，本校，地域の学校園が連携しながら実践的研究を推進し，地域に根ざした教員養成大学および附属校となることを目指している。

滋賀県総合研究センター研究員研究発表

川原林 正宏

「小学校における e-Learning 教材を活用した授業に関する研究 - 算数科で教師のニーズに合い、基礎・基本の定着につながる e-Learning 教材の作成 - 」

要旨：滋賀県総合教育センターの基礎学力定着リサーチによる調査結果から、児童が公式をつくる過程や図形の構成要素を理解することに課題がみられた。そこで、算数科の「四角形と三角形の面積」で、e-Learning 教材を作成し、単元計画へ位置付けた。作成にあたっては、授業展開に柔軟に対応できるよう、4つのタイプ（提示型教材、操作型教材、説明型教材、ドリル型教材）に分類し、児童が図形の変化の様子を理解しやすいようアニメーションや動画を用いた。教材を使った授業実践により、基礎的な知識・技能の定着につながるものであることがわかった。

國領 正博

「中学校における e-Learning システムの活用に関する研究 - 理科における金属の特徴の発見や課題解決を支援する教材の作成 - 」

要旨：時間や設備等の諸条件により、中学校理科の授業では生徒が取り組める実験の種類や内容に制約を受ける。その結果、課題解決に向けて思考するための材料となる実験結果が減少してしまう。そして、一つひとつの観察や実験から得られた知識は身に付いても、その幅は狭く、自らの予想や仮説と観察・実験の結果を比較し、考察を深める機会が少なくなる。本研究では、しが e-センターに導入された e-Learning システムを活用し、中学校理科「身の回りの物質」における金属の特徴の発見や課題解決を支援する教材を作

成して授業実践を行い、教材の有効性を検証した。

講演

滋賀大学教育学部教授 堀越 昌子

「食育で何をめざすのか」

要旨：今、食育が各地域で展開されています。食次第で健康にも病気にもなりますので、食品を適切に選ぶことができ、料理がつくれ、自分の健康が保てるように、食の基本をしっかりと習得してほしいと願っています。しかし食育が食べ方だけの細かい指導に陥らないような注意も必要です。滋賀県には湖魚をはじめとして、ユニークな食文化が築かれています。若い世代がこれらの文化を習得していくことは、自分の基盤、自分の夢をしっかりと築いていくためにも必要なことだと思っています。豊かな食生活を謳歌している日本がいかにもろい基盤の上に立っているか、今の子どもたちはその怖さを知りません。地域の文化や農業のこと、地球環境のことに思いをはせながら「食べる行為」ができるような人を育てていかないといけないと思います。地域ぐるみで、親も巻き込んで、食のあり方を考え、暮らしを変えていけたら、子どもたちは健康で自立した国際人、地球人に育っていったくれるに違いありません。

食育は「頭でっかちでひ弱な子供」を「手足をよく動かし、夢を持ち行動できる子供」に育てあげていくための絶好のチャンスでもあります。そのためにも研鑽を積んで、食育の中身を研究し、提案していかなければならないと肝に銘じています。